

**[資料紹介] ヒューム『イングランド史』抄訳(4)
附録3(中)**

著者	池田 和央, 犬塚 元, 壽里 竜
雑誌名	關西大學經濟論集
巻	56
号	4
ページ	443-461
発行年	2007-03-10
その他のタイトル	Abridged Translation of Hume's History of England 4 (Appendix3-b)
URL	http://hdl.handle.net/10112/12747

資料紹介

ヒューム『イングランド史』抄訳（4） 附録3（中）

池 田 和 央
 犬 塚 和 元
 壽 里 竜

イングランドの政府〔以上前号〕——歳入——商業——軍事力——習俗〔以上本号〕——学術

歳入 女王エリザベスの儉約¹⁾は驚くべきほどで、いくつかの点では強欲すれすれだったようである。なしで済ませることができるのであれば²⁾、わずかな出費といえども彼女の目には多額の出費に映り、彼女は、もっとも込み入った交渉事のさなかの急使の費用といったものですら節約しようとした¹⁾。彼女はあらゆる儲けに目敏くもあり、いささか常軌を逸しているようにみえようとも利得の機会を逃さなかった。例えば、彼女はエリー主教座を19年にわたって空席としたが³⁾、それはその主教座の収入を得るためであったし^{m) 4)}、彼女が主教を叙任するにあたっては [371] その主教座から荘園をいくつか奪い取るのが通例であったⁿ⁾。しかし、財宝を一切貯めなかったことや、差し迫った必要がないときには議会からの補助金を拒否さえしたことから判断すると、実際のところ、女王の気質のうちには強欲はわずかにしか、もしくは全く存在しなかつ

1) [* Queen Elizabeth's oeconomy 1759-78 | Queen Elizabeth's economy Liberty edn. (以下 oeconomy の表記については省略する。)]

2) [* be saved 1759-73b | be spared 1778]

1) Birchs Negot. p.21 †. [Thomas Birch (1705-66), *An Historical View of the Negotiations between the Courts of England, France, and Brussels, from the Year 1592 to 1617*, London, 1749.]

3) [* She kept the see 1759-67b | She kept, for instance, the see 1770-]

m) Strype, [Annals] vol. iv. p.351 †. [num. CCLIX.]

4) [* to pocket 1759-67b | to retain 1770-]

n) Ibid. [Strype, Annals] p.215 †. [num. CXLIX.] [* the rest of this note add. 1778] エリー主教に宛てて書かれ、その主教座の簿冊に保存されている、女王の面白い手紙がある。それは次のように書かれている。「尊大なる主教よ、余は、汝が自らなした合意に従うことに消極的であると理解した。だが余としては、汝を現在の地位に就けたこの余は、そちを解任することができる、ということ汝に知らしめたい。そして、もし汝が直ちに約束を実行せねば、神にかけて、たちどころに汝を聖職から外すであろう。自らを穢している汝に。エリザベス」[引用部分は原文イタリック]。どうやらこの主教は、主教座に属する土地の一部分をうわべだけそれと同等なものと交換すると契約して、そして上記の手紙の結果として実際に履行したようである。Annual Register, 1761. p.15.

たようである⁵⁾。とはいっても、ここから、民衆を思いやり心にかけていたからこそ彼女は儉約した、と結論してはならない。彼女は独占や排他的特許状といった政策で民衆を苦しめたが、これらは、規則的に平等に徴収される課税のもっとも重いものよりもはるかに抑圧的である。彼女の質素な行動は、本当のところは、独立を望む彼女の意向や、自らの威厳を保とうとする彼女の配慮に由来した。もし彼女が、議会からの補助金に頻繁に依存する必要に迫られたとしたならば、こうした独立や威厳が危うくなりかねなかったのである。この動機があったからこそ女王は、たとえ利得が多く必要不可欠な戦争に取り組んでいようとも、ごく適正な額であれ、庶民院に補助金を要求するよりも王領地を蚕食し続けるほうが賢明だと考えた⁶⁾。結婚せず子供がなかったから、彼女は現在の目的に間に合えばそれで満足であったが、彼女の後継者たち〔＝ジェイムズ1世・チャールズ1世〕がそのつけを支払うことになる。彼らは、この〔エリザベスの〕政策にその他の事情⁶⁾が加わった結果として、極度の貧困へと突如として陥っていることに気づくことになった⁷⁾。<34/68>

この時代においては、宮廷の華やかさこそが公的な出費の大部分を占めた。エリザベスは独身の女性で、洋服を除いては派手なことに支出が嵩まなかったことが⁸⁾、わずかばかりの歳入で彼女が偉大な事柄を成し遂げた理由である。伝えられるところによれば、彼女は、父・弟・姉〔＝ヘンリ8世・エドワード6世・メアリ〕が王室に残した借金40万ポンドを返済したという。当時としては信じがたい額である⁹⁾。[372] 彼女の死の時点で、諸州〔＝ネーデルラント〕は彼女に約80万ポンドの借金があり、フランス王〔アンリ4世〕は45万ポンドを借りていた⁹⁾。このフランス王は極端につましく、ヴェルヴァンの和平の後には財宝を貯め続けたのだが、女王はしつこい催促にもかかわらず⁹⁾、借金を返済するように彼を説得することができなかった。この借金は、彼が差し迫った困難に直面したときに、彼女が気前よく融通したものであったにもかかわらず、である。彼女はただ2万クロネを1回、もう1回は5万クロネの支払いを受け取ることができたのみだった

5) [* there was in reality **1759-73a** | in reality there was **1773b**-]

o) Rymer, [*Foedera*] tom. xvi. p.141 †. [‘Super miserabili Statu Regis Franciq’.] D’Ewes, [*Compleat Journal*] p.151 †, 457 †, 525 †, 629 †. Bacon, [*Works*] vol. iv. p.363 †. [‘Observation upon a Libel’.]

6) [* other accidents **1759-67b** | other circumstances **1770**-]

7) [Cf. J. P. Sommerville ed., *King James VI and I: Political Writings*, Cambridge, 1994, p.48.]

8) [* in no species of magnificent **1759** | in no kind of magnificent **1763**-]

p) D’Ewes, [*Compleat Journal*] p.473 †. 国の借金のこの説明を、1553年に王室の借金はわずか30万ポンドであったというストライプの説明 (Eccles. Mem. [*Ecclesiastical Memorials*] vol. ii. p.344 †.) と整合させることは不可能のように思う。この30万という総額のほうがずいぶんもっともらしいように思われる。女王エリザベスの全歳入ではその10年分を費やしても、40万ポンドを返済できなかったであろう。

q) Winwood, vol. i. p.29 †, 54 †. [Edmund Sawyer, *Memorials of Affairs of State in the Reigns of Q. Elizabeth and K. James I: Collected (Chiefly) from the Original Papers of the Right Honourable Sir Ralph Winwood*, London, 1725, 3 vols., vol. 1.]

9) [* the most pressing remonstrances **1759-73a** | the most pressing importunities **1773b**-]

が、それは、アイルランドの反乱によって苦境に陥ったことを彼女が強く申し立てたからであった^{r)}。女王は、1589年から1593年のスペインとの戦争では130万ポンドを費やし、それに、わずかに議会から付与された28万ポンド相当の2単位の補助金加わった^{s) 10)}。1599年にはアイルランドの軍役に¹¹⁾、6ヶ月間で60万ポンドを費やした^{t)}。ロバート・セシル卿が言うところによれば、10年間で¹²⁾アイルランドには340万ポンドを費やしたとのことである^{u)}。かの国の統治にエセックス伯が赴くに際しては、彼女は彼に3万ポンドを贈った^{w)}。バーリ卿は、この寵臣に与えられたプレゼントの総額は30万ポンドになると試算したが、ここにはおそらく誇張があるとはいえ、この額は彼女が彼をいかに強く想っていたかを示す証である！¹³⁾ 女王は気前よく支払うが報奨は渋い、これがこの治世に決まって言われていたことであった^{x)}。<35/68>

女王の通常の歳入を正確に算定することは困難であるが、確実なことは、年50万ポンド¹⁴⁾にははるかに及ばなかったということである^{y)}。1590年に彼女は、関税を年1.4万ポンドから5万ポンド¹⁵⁾に引き上げて、徴収役のトマス・スミス卿に対しては、それまでに溜めこんでいた利得の一部を戻すように命じた^{z)}。この歳入の引き上げは[373] カマーザンという人物の助言に従ったものであり、バーリ、レスタ、ウォルシinghamは反対したが¹⁶⁾、女王の決意は固く、彼らの反対を押

r) Winwood, [Sawyer, *Memorials*] vol. i. p.117 †, 395 †. [* Ibid. **1759-73b** | Winwood **1778**]

s) D'Ewes, [*Compleat Journal*] p.483 †.

10) [* beside the double subsidy **1759-67b** | beside the pittance of a double subsidy **1770-**]

11) [* in the service of Ireland **1759-67b** | on the service of Ireland **1770-**]

t) Camden, [*History*] p.167.

12) [* in ten years time **1759-73a** | in ten years **1773b-**]

u) Appendix to the earl of Essex's apology. [Earl of Essex, Robert Devereux (1566-1601), *An Apologie of the Earle of Essex: Against those which Jealously, and Maliciously, Tax him to Be the Hinderer of the Peace and Quiet of his Country. Penned by himselfe in Anno 1598*, London, 1603.]

w) Birch's Memoirs, vol. ii.

13) [* A [a **1763, 67a**] proof **1759-67b** | a sum, which, though probably exaggerated, is a proof **1770-**]

x) Nanton's Regalia, chap.1. [Robert Naunton (1563-1635), *Fragmenta regalia, or Observations on the Late Queen Elizabeth, Her Times and Favorits*, London, 1641.]

14) [* pounds a year **1759-73a** | pounds a-year **1773b-** (以下1773b年版における a year の綴りの変化は省略。)]

y) [* *this note add.* **1763-**] フランクリンの『年代記』[Frankland, *Annals*] p.9 †によれば、後見権にもとづく収入やランカスター公領の収入の他には(これは約120,000ポンドであった)、王国の収益は188,197ポンドであった。この計算には王領が含まれているようである。

15) [* to fifty thousand pounds **1759-63** | to fifty thousand **1764-**]

z) Camden, [*History*] p.558. キャムデンのこの説明は、庶民院の記録に示されている、次の治世初期における関税の状態とは、辻褄を合わせることが困難ないしは不可能である。See Hist. of James, chap.46 [*History*, 5: 40-42.] [* Hist. of Great Britain, vol. I, chap. I **1759** | Hist. of James, chap. I **1763, 67a** | Hist. of James I. chap. i **1764, 67b** | Hist. of James, chap. 46 **1770-**]

16) [* was extremely opposed **1759-67b** | was opposed **1770-**]

し切った。かくもわずかな歳入と、あれほどまでに少ない民衆からの補助金だけで彼女が種々の偉業を成し遂げたことは、知恵と節約の力強い成果を示している。彼女が議会から受け取ったのは、治世を通じてたった20単位の補助金と39単位の十五分の一税のみである。私はこうした補助金の総額が正確にいくらであったかを確定することはしないが¹⁷⁾、それは、補助金1単位の価値がずっと下落傾向にあり、治世の初めには12万ポンドであったが¹⁸⁾ 治世の終わりにはたった8万ポンドとなったからである^{a)}。とはいえ、もし45年の統治のあいだにエリザベスに与えられた補助金を300万ポンドと仮定してみても¹⁹⁾、おそらくは真実から遠く外れることにはならないであろう^{b)}。この額に従えば、年あたりでいえばわずか66,666ポンドということになるが、女王の要求がかくも控え

17) [* It is not easy to compute **1759-67b** | I pretend not to determine **1770-**]

18) [* which in the beginning had been **1759** | though in the beginning it had been **1763-**]

a) D'Ewes, [*Compleat Journal*] p.630 †.

19) [* If we suppose that the whole supplies granted Elizabeth **1759** | If we suppose that the supplies granted Elizabeth **1763-67b** | If we suppose, that the supplies, granted Elizabeth **1770-**]

b) [* *this note add. 1763-*] ソールズベリ卿はこうした補助金をたった280万ポンドと計算している (Journ. 17 Feb. 1609)。国王ジェイムズが、女王は1年に137,000ポンドの補助金を受けていたと見積もったのは明らかに誤りであった (Franklyn [Frankland, *Annals*], p.44)。[* *the rest of this note add. 1778*] 奇妙な話だが、1754年からの戦争において内閣は、一定期間のあいだ、女王エリザベスが45年間に議会から付与されただけの巨額を2ヶ月で消費してよいと許可された。先のこの戦争がめざした実に瑣末な目的とエリザベスの戦争の重要さをふまえると、このことはなおさら異彩を放って見える。しかも、女王が歩兵に日当8ペンスを支給していたことからわかるように、この双方の期間においては貨幣の価値もほとんどの点で同じであった。ところが、近年われわれのあいだに広まっている幻想は歴史上知られたいかなるものをも凌いでおり、十字軍の際の幻想ですらもその例外ではない。というのも、聖地への道が天国への道でないということを示す数学的証明も、ましてや算術的証明も存在しないように思われるが、国債の無制限の増加が国民の崩壊に至る直接の道である、ということについては証明されているからである。だが、今ではそうした結末へと完全に到達してしまったので、今さら過去のことを考察する必要はない。本年1776年には、トレント川の北からレディングの西に至るこの島の全ての歳入が、未来永劫にわたって抵当に入ったか先取りされたことが判明するであろう。残りの小さな領土については、これらの領地がオーストリアやプロシアの掌中に落ちたとしたなら、より悪い状況になるのだろうか。もし違いがあるとすれば、ヨーロッパ〔大陸〕では、そうした大君主たちが、獲得した領土を手放さねばなくなるような出来事も生じうるという点のみである。とはいっても、われわれに対する債権者が要求を放棄したり、公衆が歳入を差し押さえたりする状況になるとは到底考えられない。われわれの愚かさはあまりにはなはだしかったので、これからわれわれを待ち受けるであろう無数の悲惨な状況においても、われわれは同情してもらい資格を欠いてしまっているほどである。[* Lord Salisbury computed them at two millions eight hundred thousand pounds. Journ. 17. February 1609. King James was certainly mistaken when he computed the queen's [Queen's **1763-70**] supplies at 135,000 pounds a year, Franklyn, p.49. **1763-73b** | Lord Salisbury, computed these supplies only at 2,800,000 pounds, Journ. 17 Feb. 1609. King James was certainly mistaken, when he estimated the queen's annual supplies at 137,000 pounds, Franklyn, p.44. **1778**]

めで出費もうまく管理されていたにもかかわらず、[374] 彼女が議会から補助金を得るのに²⁰⁾ 苦労したり、王領地を売却せねばならなくなったりしたのは驚きである。しかし、すでにほとんど語り尽くしたように²¹⁾、この時代の議会の馬鹿馬鹿しいまでの吝嗇はこれほどまでに極端であった。彼らはとにもかくにも、自らの金銭ばかりを大切にしたのである。議員は宮廷とのつながりは何もなく、彼らが自分たちに委ねられていると考えた信託の内容というのは、王の要求金額を減らして、可能な限り王に付与する補助金を少なくすることであった。他方、王の側では、議会のことを単に金づるとしてしか考えていなかった²²⁾。女王は、まれにしか議会を召集しないことを民衆に誇った²³⁾。誰もこの集まりが苦情・困窮を解決するとは期待してはおらず、議会はただ税を課すためだけに集う会議だと思われていたのである。<36/68>

エリザベスの治世に至るまでは²³⁾、イングランドの王たちは、強制でない借り入れについては概ねアントウェルペン市に頼っていたが、王たちの信用は低く、10%ないし12%の高利の支払いに加えて²⁴⁾、ロンドン市を保証人に加えることを強いられていた。この治世を華々しく飾る人物のうちには、進取の気質に富んだ偉大な商人トマス・グresham卿がいるが、彼は、冒険商人の会社に女王に融資するように取り計らった。すると、女王は定期的に返済したので²⁵⁾、彼女の信用は次第にロンドン市中において確立していき、彼女はこれまでのように外国人に頼らずにすむようになった²⁶⁾。<37/68>

ところが²⁶⁾、1559年に女王はグreshamを派遣して、アントウェルペンにて彼女名義で20万ポンドを借りさせた。それは、その当時極端に質の悪かった硬貨を改鑄できるようにするためであった²⁷⁾。賢明でないことに²⁸⁾、彼女は自らが硬貨に手を加えてしまい、それまで60シリングであった銀1ポンドを62シリングへと分けた。これがイングランドにおいて硬貨に手が加えられた最後である。<38/68>

20) [* of getting a supply **1759-67b** | of obtaining a supply **1770-73a** | in obtaining a supply **1773b-**]

21) [Cf. *History*, 3: 149, 310, 476-77.]

22) [* than a means of supply **1759-67b** | than as a means of supply **1770-**]

c) Strype, [*Annals*] vol. iv. p.124 †. [num. LXXX.]

23) [* Before Queen Elizabeth's reign **1759-73a** | Before the reign of Elizabeth **1773b-**]

24) [* besides the exorbitant interest **1759-67b** | besides paying the exorbitant interest **1770-73a** | besides paying the high interest **1773b-**]

25) [* regularly paid **1759-73b** | regularly re-paid **1778**]

d) Stowe's *Survey of London*, book i. p.286 †. [Stow, *A Survey of the Cities of London and Westminster: Containing the Original, Antiquity, Increase, Modern Estate, and Government of those Cities, Written at first in the Year MDXCVIII*, London, vol. 1, 1720.]

26) [* however, *add.* **1773b-**]

e) MS. of lord Royston's from the paper office, p.295.

27) [* reform the coinage **1759-73a** | reform the coin **1773b-**]

28) [* unpolitic **1759-73a** | impolitic **1773b-**]

商業

女王エリザベスは、彼女の支配する王国の防衛がどれほどまでに海洋における力に依存しているかを理解していたので、商業や海運を熱心に奨励した。ところが、彼女が推進した独占事業は、国内のインダストリを根こそぎに破壊することにつながったので——実際のところは国内のインダストリのほうが対外交易よりもはるかに重要でありこれこそが対外交易の基盤である——、彼女の一連の施策は、彼女がめざした目的に適うものではなかったし²⁹⁾、ましてや民衆の富を増やすはずもなかった。[375] 独占企業も同じように対外交易を直接に阻害した。しかし、こうした阻害要因にもかかわらず、時代の精神は海洋上の事業に著しく傾倒していた。スペイン人に対する軍事遠征のみならず、新しい発見をめざして多くの試みがなされ、こうしてイングランド人が対外交易の新しい経路を数多く開拓することになったのである。マーチン・フロービシャー卿は北西航路を見つけようとして3つの失敗航海をなし、デイヴィス³⁰⁾はこの失敗にもめげず³¹⁾再挑戦して、彼の名前で呼ばれている海峡を発見した。1600年、女王は東インド会社に最初の特許状を与えた。会社の資本金は72,000ポンドで、この新しい航路の交易のために、ジェームズ・ランカスター³²⁾指揮のもと4隻の船が建造された。冒険は成功して船は豊かな積荷とともに帰還したので、東インド会社はこの商業を続けることに³³⁾積極的になった。<39/68>

モスクワとは、女王メアリのときにアルハンゲリスクへの経路が見つかって以来交流が始まっていたが³⁴⁾、1569年頃まではこの国との商業は微々たるものであった³⁵⁾。女王〔エリザベス〕はツアーリから、モスクワとの一切の交易についてイングランド人に委ねるという排他的な特許状を獲得し^{f)}、さらに彼女は彼とのあいだに、国家同士の同盟のみならず個人的な同盟も取り結んだ。このツアーリはイヴァン・ヴァシレーヴィチ〔=イヴァン4世³⁶⁾〕という凶暴な暴君で³⁷⁾、臣民の反乱を常に警戒しており³⁸⁾、同盟の条件としてイングランドへの安全な亡命と保護を要求した。この頼みの綱を確実にするために彼はイングランド人女性との結婚を決意し、そこで女王は、ハンティンドン伯の娘³⁹⁾アン・ヘイスティングスを彼のもとに嫁がせるつもりであった。しかし、こ

29) [* was very ill calculated 1759-73a | was ill calculated 1773b-]

30) [John Davis (c.1550-1605).]

31) [* not disheartened 1759-67b | not discouraged 1770-]

32) [James Lancaster (c.1554-1618).]

33) [* continue that commerce 1759-73b | continue the commerce 1778]

34) [Cf. *History*, 3: 463.]

35) [* began not 1759 | did not begin 1763-]

f) Camden, [*History*] p.408. [* Camden 1759-63, 67a-78 | Camden 1764]

36) [原文は John Basilides であり、Иван Васильевич (Ivan Vasilievich) の英語表記であると思われる。つまりイヴァン4世(1530-84)である。]

37) [* a most furious tyrant 1759-67b | a furious tyrant 1770-]

38) [* who [, add. 1770-73a] suspecting continually the revolt 1759-73a | who, continually suspecting the revolt 1773b-]

39) [* daughter to the earl 1759-67b | daughter of the earl 1770-]

の女性は、かの国の野蛮な習俗を知らされると、自らの安逸・安全を犠牲にしてまで帝国を手に入れることを賢明にも止めることにした^{g)}。<40/68>

イングランド人はヴァシレーヴィチから得た特権に励まされ、かつて他のヨーロッパ人がなした以上にこの地域の奥地へと⁴⁰⁾ 踏み入っていった。彼らは、1本のまるごとの木から作ったボートを用いて〔アルハンゲリスクから〕ドヴィナ川に沿って商品を運び、そのボートを漕いだり曳いたりして流れを上り、ヴォーログダにまで到達した。そこから⁴¹⁾ 彼らは7日かけて陸路でヤロスラヴリまで商品を運び、今度はヴォルガ川をアストラハニまで下った。アストラハニで〔376〕彼らは船を作ってカスピ海を横断し、そしてペルシャで製品⁴²⁾ を捌いたのである。しかしこの大胆な試みには困難が多く、これっきりであった^{h)}。<41/68>

イヴァン・ヴァシレーヴィチの死ののち、その息子フョードル⁴³⁾ は、イングランド人が享受していたロシアとの交易の独占という特許状を破棄した。女王がこの変更を非難すると⁴⁴⁾、彼はエリザベスの公使たちに対して、王たるものは臣民同士についても外国人同士についても公平に扱わねばならないのであり、国際法によって誰にでも開かれているはずの交易を少数者の私的利得のための独占へと捻じ曲げてはならない、と告げたⁱ⁾。輝かしい女王エリザベスの行動に現れたよりも⁴⁵⁾、この野蛮人のほうが商業についてはるかに正しい理解を具えていたのだ！ もっともフョードルは、ヨーロッパと自国との経路を発見したという理由から⁴⁶⁾、イングランド人にいくつかの特権を残した。<42/68>

トルコへの交易はおおよそ1583年頃に開始され⁴⁷⁾、エリザベスはすぐにその商業をある会社に独占させた。〔トルコの〕大王は、その時までは常にイングランドのことをフランスの属州と考えていたが^{k)}、しかし女王の力と評判を聞いてからはイングランド人を歓待するようになり、フランス人に与えた以上の特権を与えるまでになった。<43/68>

ハンザ同盟都市の商人たちはエリザベスの治世が始まってすぐ、エドワードとメアリの治世にお

g) Ibid. [Camden, *History*] p.493.

40) [* into these countries **1759-73b** | into those countries **1778**]

41) [* From thence **1759-73b** | Thence **1778**]

42) [* their commodities **1759-67b** | their manufactures **1770-**]

h) Camden, [History] p.418. [* Ibid. **1759-67b** | Camden **1770-**]

43) [原文は Theodore であり、Фёдор (Fyodor) の英語表記であると思われる。Фёдор Иванович (Fyodor Ivanovich) とは、イヴァン4世の子であるフョードル1世 (1557-98) である。]

44) [* and when the queen remonstrated **1759-73a** | When the queen remonstrated **1773b-**]

i) Camden, [History] p.493. [* Ibid. **1759-67b** | Camden **1770-**]

45) [* than were practiced by the renowned queen Elizabeth **1759-73b** | than appear in the conduct of the renowned queen Elizabeth **1778**]

46) [* their being the first discoverers **1759-67b** | their being the discoverers **1770-**]

47) [* was begun about 1583 **1759-67b** | commenced about the year 1583 **1770-**]

k) Birch's Memoirs, vol. i. p.36 †.

ける⁴⁸⁾ 処遇について声高に不平を述べた。彼女は賢明にも⁴⁹⁾、何も変更するつもりはなく商人たちに認めた⁵⁰⁾ 諸特権を通じて引き続き彼らを保護する、と返答した。この回答は彼らを満足させなかったもので、ほどなく彼らの商業はしばし中断することとなったが、これは、自分たちの商業を拡大するために努力を惜しまなかったイングランド商人を大いに利することとなった⁵¹⁾。あらゆる交易は彼らの掌中に納まり、そして利益があがることが明らかになると、彼らはステーブル(取引市場)商人と冒険商人とに分かれて活動した。前者が常に1箇所では活動するのに対して、後者は⁵²⁾、衣服やそのほかの製品をもって他の都市や外国に乗り出したのである。こうした成功はハンザ同盟都市を怒らせるところとなり、彼らは、不満をもった人間が思いつくありとあらゆる手立てを駆使して、[377] 他の国民や国家がイングランド商人について悪評を抱くように仕向けた。彼らの策は功を奏して、[神聖ローマ]帝国内におけるイングランド人の商業従事を一切禁じる⁵³⁾ 帝国勅令を得たほどであった。これに対して女王は報復として、スペイン人の密輸品を運ぶ彼らの船をタホ川⁵⁴⁾で拿捕し、うち60隻を拘束した。女王はこの交易都市とのあいだのあらゆる対立点について和解を望んでいたから、これらの船を返還する心積もりであったが、しかし、リューベックでイングランドの交易を邪魔するための方策を協議する会議が開かれたと聞くや否や、彼女は船と積荷を没収した。うち2隻のみは解放されたが、それは経緯を本国に伝え、彼らの一連の対応について女王が考えうる限りで最大の軽蔑の念を抱いている、と諸都市に知らしめるためであった¹⁾。

<44/68>

ヘンリ8世は海軍を整備するために、ハンブルグ、リューベック、ダンツィヒ、ジェノヴァ、ヴェネツィアから船を借りねばならなかった。しかしエリザベスは治世のごく初期に、彼女自身の船をいくらか建造するとともに、商人に巨大な商船——それは必要とあれば戦艦として転用された——の建造を奨励して、事態を改善した^{m)}。1582年にイングランドの船員は14,295名ⁿ⁾、船舶は1,232隻であったが⁵⁵⁾、このうち80トン超級はわずか217隻のみであった。マンソンによれば⁵⁶⁾、海運はジェームズ1世の治世初期に、外国船を用いて交易を行った商人の活動によって衰退したもの

48) [* in the days of King Edward and Queen Mary 1759-67b | in the reigns of Edward and Mary 1770-]

49) [* She very prudently replied 1759-67b | She prudently replied 1770-]

50) [* which she found them possessed of 1759-67b | of which she found them possessed 1770-]

51) [* effectuate for promotion of their commerce 1759-73b | effect for promoting their commerce 1778]

52) [* the other 1759-73b | the latter 1778]

53) [* the English merchants were prohibited 1759-73a | the English were prohibited 1773b-]

54) [* the river of Lisbon 1759-67b | the river Tagus 1770-]

1) Lives of the Admirals, vol. i. p.470 †. [John Campbell (1708-75), *Lives of the Admirals, and Other Eminent British Seamen*, London, 1750.]

m) Camden, [*History*] p.388.

n) Monson, [*Naval Tracts*] p.256.

55) [* were computed at 1759-73b | were found to be 1778]

56) [* Monson computes 1759-67 | Monson pretends 1770-]

の^{o)}、1640年を迎える頃には、イングランドの船員の数は上記の3倍になっていたという^{p)}。
<45/68>

軍事力 女王が死んだとき残されていた海軍については、もし42隻という戦艦の数だけに着目するならば⁵⁷⁾、かなりのもののように思われる。しかし、そのどれもが40門を超えては大砲を具えていなかったこと、40門装備していたのは4隻のみであったこと、1,000トン級の船舶はたった2隻であったこと、23隻は500トン以下で、50トン級が数隻、何隻かはなんと20トン級であったこと、そして戦艦の大砲は全てあわせて774門であったことをふまえると^{q)} 58)、今現在の戦力と比べて、イングランド海軍はひどかったと考えざるをえない^{r)} 59)。[378] 1588年に貴族と港湾都市が用意した⁶⁰⁾ 200トン超の船舶は5隻を下回った^{s)}。<46/68>

1599年にスペイン人が侵攻してくるとの警戒が伝えられると、女王は彼らに対抗するために2週間で戦艦を装備して軍を徴集した。この迅速な装備ほど、イングランドの力を外国人に知らしめたものはなかった。1575年において、王国の全民兵は182,929人であったと計算されている^{l)}。1595年には、ウェールズからの人員に加えて、140,000人が配備された^{u)}。これらの軍はたしかに数においては強大であったが、しかし、規律と経験はそれに見合っていない。ダンケルクとニューポートからは小隊が頻繁に押し寄せて東海岸を掠奪している有様で、当時の民兵は王国の防衛には全く不向きだった。州の統監が各州に任命されたのは、この治世が最初である。<47/68>

マーティン氏は^{w)} ソールズベリ・コレクションから一文書を公刊したが⁶¹⁾、そこに描かれているスペイン無敵艦隊襲撃の際の国民の軍事力は、われわれに馴染みの歴史家たちの説明とは幾分食い違っている。それによると、王国の強壯な男は全てあわせて111,513人、軍務に就いているのは80,875人、そのうち訓練を受けているのは44,727人である。ここでの強壯な男とは、登録された人々のみであると考えざるをえないが、それというのも、そうでなければこの少ない数を説明でき

o) Ibid. [Monson, *Naval Tracts*] p.300.

p) Ibid. [Monson, *Naval Tracts*] p.210, 256.

57) [* when we consider 1759 | when we reflect 1763-]

q) Monson, [Naval Tracts] p.196. イングランド海軍は、現在では14,000門の大砲を所持している。

58) [* But when we reflect 1759 | But when we consider 1763-]

r) [* this note add. 1770-] 巻末の注 NN を参照。[* note 1770-73a | note [NN] 1773b-]

59) [* a very contemptible idea 1759-67b | a contemptible idea 1770-]

60) [* equipped by 1759-67b | fitted out by 1770-]

s) Monson, [Naval Tracts] p.300. [* Ibid. 1759-63, 67a | Monson 1764, 67b-]

t) Lives of the Admirals [Campbell, *Lives of the Admirals*], vol. i. p.432.

u) Strype, [Annals] vol. iv. p.211 †.

w) p.608 †. [Murdin, *A Collection of State* ('The Abstract of the Numbers of Every Sort of the Armed Men in the Counties through the Kingdom, taken Anno 1588').]

61) [*Mr. Murden has published a paper 1759-73b | Mr. Murden has published from the Salisbury collections a paper 1778]

ないからである。⁶²⁾ところがこれに対してエドワード^{x)}・クック卿は⁶³⁾、この頃に、首席裁判官ポパム⁶⁴⁾とともにイングランドの全ての民衆を調査した結果、全階層あわせてその数が900,000人であると判明した、と庶民院で発言した。この数字に従うなら、通常の算出手順によれば、軍役に就くことができる男は200,000人以上だったということになる。しかしこの数でさえ驚くほど少ない。われわれは、現在では王国の人口は6倍から7倍にもなっていると判断してよいのであろうか⁶⁵⁾。そして、マーディンの示す数は、カトリック、子供、虚弱な者⁶⁶⁾を除外した実際の数値であったと考えてよいのであろうか。[379] <48/68>

⁶⁷⁾ハリソンによれば、1574年と1575年に行われた召集において、軍務に従事できる男はあわせて1,172,674人であったが、しかし1/3の人々は丸々数字から漏れていると考えられていた。こうした説明の全てには、このような不確かさや矛盾がある⁶⁸⁾。彼の示すこの数値は大きい、それにもかかわらずこの著者は人口の減少を強く嘆いている。これは、どこでもいつでも見られる通俗的な不満なのである。グイッチャルディーニは、この治世のイングランドの住民はあわせて200万人であると計算している。<49/68>

⁶⁹⁾各時代に⁷⁰⁾イングランドの人口がいかに推移したかについてどう考えるにせよ、認めなければならないのは、国債から推し量るかぎり⁷¹⁾、前世紀〔=17世紀〕初頭以来、おそらくは他のどのヨーロッパの諸国にもましてイングランドでは軍事力が顕著に増強されてきた、との点である。女王エリザベスの死の時点において3王国で用いることができた以上の軍事力を、今ではアイルランドのみで用いることができる、と言っても誤りでない。さらに、ヘンリ5世の頃にはカレーのような小さな町の1つの要塞を維持する費用が、通常の家計歳出の1/3以上に相当していたのであるが、そのヘンリ5世の頃に王国全体でなしえた以上の規模の軍事行動を、いまやイングランドの優良な1州が遂行あるいは少なくとも維持できる⁷²⁾、と主張することも可能である。これが、自由、イン

62) [* *the rest of this para. add. 1763-*]

x) [* *this note add. 1763-*] Journ. 25 April, 1621.

63) [* Sir Edward **1763, 67a** | Sir [sir **1770-73a**] Edward Coke **1764, 67b-**]

64) [John Popham (c.1531-1607).] [* Popham, Lord Chief Justice **1763, 67a** | Popham, lord chief justice **1764, 67b** | Popham, Chief Justice **1770-73a** | Popham, chief justice **1773b-**]

65) [* Can we suppose that [thus **1763, 67a**] the kingdom is seven times more populous **1763-67b** | Can we suppose that the kingdom is near seven times more populous **1770-73a** | Can we suppose that the kingdom is six or seven times more populous **1773b-**]

66) [* catholics and infirm persons **1763-73b** | catholics and children and infirm persons **1778**]

67) [* *this para. add. 1770-*]

68) [* Such uncertainty and contradiction is there **1770-73b** | Such uncertainty and contradiction are there **1778**]

69) [* *this para. add. 1763-*]

70) [* in these two periods **1763-67b** | in different periods **1770-**]

71) [* , abstracting from the national debt, *add. 1778*]

72) [* is capable of make, at least of supporting, a greater effort than the whole kingdom was **1763-73a** | is able to make, at least to support, a greater effort than the whole kingdom was capable of **1773b-**]

ダストリ、優れた統治の成果なのである！ <50/68>

イングランドのマニュファクチャの状態はこの時代には非常に低調で、ほとんど全ての種類の製品において外国製品が勝っていた^{y)}。1590年頃に補助金台帳において4,000ポンドもの高額の評価額が下されていたのは、ロンドンにおいてたった4人であったが^{z)}、この算定が彼らの富を正確に評価していたと考えることはできない⁷³⁾。1567年に調査がなされ、4,851人の外国人がロンドンにいたことが判明した。うち3,838人がフランドル人⁷⁴⁾で、スコットランド人⁷⁵⁾はたった58人であった^{a)}。フランスや低地帯〔＝ネーデルラント〕における宗教迫害によって、そのうち多数の外国人がイングランドに追いやられ、イングランドのマニュファクチャと商業は彼らによって著しく改善されることとなった^{b)}。こうした商人を歓待するために、トマス・グレンシャム卿が自腹で交換所の壮麗な建物を建築したのはまさしくこの時であり、そこを訪れた女王はこれを王立取引所と名付けた。 <51/68>

⁷⁶⁾ 言語の偶然の変化は人々の考えに大きな影響を及ぼすが、幸運にも偶然の変化によって、高利貸し (usury) という悪い意味合いの言葉は、[380] 金銭に対して高低を問わず利息を取るといふそれまでの意味から、法外で不法な利息を取るといふ意味だけを示すようになった。1571年に⁷⁷⁾ 制定されたある法律は乱暴にもあらゆる高利貸しを罰しているが、それでも10%の利息の支払いは許しているのである。フランスのアンリ4世は利率を6.5%に下げたが、これは、商業においてフランスがイングランドに大きく先んじていたことを示している。 <52/68>

⁷⁸⁾ ハウエル博士によれば⁷⁹⁾、女王エリザベスは治世第3年に、自らに仕える絹女工より黒のシルクのストッキングを贈られ、それからは編んだ長靴下は履かなくなったという。『イングランドの現在の状態』⁷⁹⁾の著者は、1577年頃ドイツからイングランドに懐中時計がもち込まれたとしている。

y) D'Ewes, [Compleat Journal] p.505 † .

z) Id. [D'Ewes, Compleat Journal] p.497. [* Ibid. 1759-67b | D'Ewes 1770-73a | Id. 1773b-]

73) [* be esteemed 1759 | to be deemed 1763-]

74) [* Flemish 1759 | Flemings 1763-]

75) [* Scotch 1759 | Scots 1763-]

a) Haynes, [Collection] p.461 †, 462 †. ['Certificate of the Nombres of all Manner of Straungers within several Wardes and Parisshes' ; 'The Nombres of all Manner of Straungers Contained in these Places and Parish' . ヒュームがここでフランドル人として挙げたのは原資料では Duche である。]

b) Stowe, [Annales] p.668.

76) [* this para. add. 1770-]

77) [* in 1572 1770-73a | in 1571 1773b-]

78) [* this para. add. 1770-]

c) [* this note add. 1770-] History of the World, vol. ii. p.222. [Willam Howell (1631/2-83), *An Institution of General History, or, The History of the World*, London (?).]

79) [この書は特定できなかった。以下のいずれかであろうか。Edward Chamberlayne (1616-1703), *Angliae notitia, or The Present State of England: Together with Divers Reflections upon the Antient State Thereof*, London, 1669; Walter Cary, *The Present State of England, Expressed in this Paradox, Our Fathers* ↗

懐中時計はニュルンベルクで発明されたとみなされている。1580年頃にはアランデル伯が4頭立て4輪馬車を導入した^{d)}。それまでは、女王は公務で出かける折には、侍従の後ろで馬に跨がっていた。<53/68>

⁸⁰⁾ キャンデンが伝えるところによれば、女王が外国大使として重宝したランドルフは⁸¹⁾、1581年にはイングランドの総郵便局長の役職にあったという⁸²⁾。したがって、その時には郵便制度が確立していたと考えられる。もっとも、1635年のチャールズ1世の規則からわかるように、それ以前には、郵便局はわずかし建設されていなかったようである。<54/68>

⁸³⁾ 1582年にハンザ同盟都市が帝国議会に提出した抗議文には、イングランドが1年におよそ200,000点の衣服を輸出していたと記されている^{e)}。この数字はかなり誇張されているように思われる。<55/68>

⁸⁴⁾ この治世の第5年には、最初の救貧法が制定された。<56/68>

⁸⁵⁾ この時代のある賢明な著者は、囲い込みの増加と耕作の衰退によってこの王国では人口が減っている⁸⁶⁾ という通俗の見解が正しかったことをはっきりさせている⁸⁷⁾。その理由についてこの著

者 were very Rich with little, and Wee poore with much, London, 1626; Anon., *A Free Conference Touching the Present State of England both at Home and Abroad*, London 1668; Elkanah Settle, *The Present State of England in Relation to Popery*, London, 1684; James Hodges, *The Present State of England as to Coin and Publick Charges*, London, 1697.]

d) [* *this note add. 1770-*] Anderson, vol. i. p.421. [James Anderson (1662-1728) ed., *Collections Relating to the History of Mary, Queen of Scotland*, Edinburgh, 1727-28, 4 vols. Cf. *History*, 4: 84; *New Letters*, 208, note 5.]

80) [* *this para. add. 1770-*]

81) [Thomas Randolph (1523-90).]

82) [* *the office of chief post-master 1770-73b | the office of post-master general 1778*]

83) [* *this para. add. 1770-*]

e) [* *this note add. 1770-*] Anderson, [*Collections*] vol. i. p.424.

84) [* *this para. add. 1770-*]

85) [* *this para. add. 1770-*]

86) [* *the country was depopulating 1770-73b | the kingdom was depopulating 1778*]

87) [ヒュームがここで論じている「この時代のある賢明な著者」とは、次の原注fで引用されている作品の著者であるが、ヒュームは著者名や作品名については沈黙したままである。ところが、次注fにおけるヒュームによる引用をアーサー・ヤングが1774年の著作でそのまま孫引きしており (Arthur Young, *Political Arithmetic. Containing Observations on the Present State of Great Britain; and the Principles of her Policy in the Encouragement of Agriculture*, London, 1774, pp.124-33)、ヤングのこの著作から、ヒュームの言及した作品が W. S., *A Compendious or Briefe Examination of Certayne Ordinary Complaints, of Diuers of Our Countrymen in these Our Dayes*, 1581であると判明する。その著者 W. S. について、ヤングは William Shakespere と推察しているが、今日では William Stafford, John Hales, Thomas Smith のいずれかであるとされている。この1581年の作品は、*A Discourse of the Common Weal of this Realm of England* というタイトルで再刊されている。ed. Elizabeth Lamond, Cambridge, 1893, 1929, 1954; ed. Mary Dewar, Charlottesville, 1969; 出口勇蔵監修『近世ヒューマニズムの経済思想：イギリス絶対主義の一政策体系』、京都大学総合経済研究所研究叢書、有斐閣、1957.]

者は非常に的確に、ウール・皮革・獣脂など牧畜全製品の輸出が完全に自由だったにもかかわらず、穀物の輸出は制限されていたことに求めている。この輸出制限は国王大権に由来するものであり、非常に賢明さを欠いた。かつて女王は、統治の初期には逆の政策を試みて⁸⁸⁾ 成功を取っていたのだが。また、この同じ著者からは、今日再び耳にするようになった、あらゆる物価が高いという不平が、このころ非常に高まったことがわかる^{d)}。[381] イングランドでは物価が顕著に高騰した時代が実のところ2つあったようであり、それは、物価が2倍になったと計算される女王エリザベスの時代と、今日である。この2つの時代に挟まれた期間には、物価の上昇は止まっていたように思われる。この中間の時代には、インダストリは金や銀と同じ速度で増加して、商品と貨幣の割合をほぼ等しく保っていたようである。<57/68>

この治世には、アメリカでの植民地建設の試みが2つあった。1つはハンフリー・ギルバート卿⁸⁹⁾によるニューファウンドランドにおけるもの、もう1つは、ヴァージニアでのウォルター・ローリ卿によるものであるが、どちらの計画もうまくいかなかった。かの輝かしい植民は⁹⁰⁾、全て次の治世以降になされたものである。王国の正貨の流通は⁹¹⁾、この治世の終わりには400万であったと計算されている^{e)}。<58/68>

レスタ伯は当時フランス大使であったフランシス・ウォルシingham卿に対して、フランスにいる乗馬の名手を1名、年100ポンドの給与に加えて本人と召使いと馬数頭を扶養するという条件で召し抱えて送るように、との要望を送った。そして伯は、「私が望むような人材は、フランスではもっと高い給料をもらえることは知っている。しかし、イングランドの1シリングは、フランスでは2シリングにもなるということを考えてもらってくれ」と続けている^{h)}。誰もが知っているように、あらゆることはこの時代からは大きく変わってしまった。<59/68>

88) [* The Queen had tried once, on the commencement of her reign, a contrary practice **1770-73a** | The queen, once, on the commencement of her reign, had tried a contrary practice **1773b-**]

f) [* *this note add.* **1770-**] わが国の幾多の住民がよく抱いた不満の1つについて、簡単・簡潔に説明しよう。この著者によれば、1581年に至るまでの20~30年のあいだに、商品の価格は一般に50%ないしそれ以上高くなった。「お隣さんよ、ほんのつい30年前には、今では12ペンスもする最上の豚や鷺鳥をこの町で買うには4ペンスも払えばよかったことや、上等の去勢鶏は3ペンスか4ペンス、ひな鶏は1ペンス、雌鶏は2ペンスだったことを覚えているかい」とこの著者は書いている (p.35 [上記訳注87を参照。1581年版 fol. 14, 1893年版 p.38, 邦訳 p.40])。ところがその当時、一般的な日当は8ペンスだった (p.31 [1581年版 fol. 12, 1893年版 p.33, 邦訳 p.34])。[1893年版と邦訳においては、1581年版ならびにヒュームの引用文とは数値など文章に相違が見られる。]

89) [Humphrey Gilbert (c.1539-83).]

90) [* All these noble settlements **1759-67b** | All those noble settlements **1770-**]

91) [* The current money **1759-73b** | The current specie **1778**]

g) Lives of the Admirals, vol. i. p.475. [Campbell, *Lives of the Admirals.*]

h) [* *this note add.* **1770-**] Digges's compleat Ambassador. [Dudley Digges (1583-1639), *The Compleat Ambassador, or, Two Treaties of the Intended Marriage of Qu. Elizabeth of Glorious Memory*, London, 1655.]

習俗

この時代の貴族は、依然として、昔ながらの豪勢な習慣をある程度はもち続けていた⁹²⁾。彼らは、歓待の席や従者の数において豪勢であった。女王は、この後者〔=従者の賄い〕に費やされる彼らの支出については、国王布告によって削減することが賢明であると考えた¹⁾。他方、歓待の出費については彼女は多少なりとも奨励したといえるが、それは、彼女が頻繁に貴族のもとを訪れて、彼らの提供する贅沢な宴⁹³⁾を享受したからである^{k)}。レスタ伯は [382] ケニルワース城⁹⁴⁾で彼女をもてなしたが、それは出費においても華やかさにおいてもずば抜けたものであった。何にもまして、365もの数の大樽のビールがその場で空にされた、とのことである¹⁾。伯は巨額を投じてこの城を増強し、そこには10,000人が装備できる武器があった^{m)}。ダービー伯は、240人の召使からなる所帯を養っていたⁿ⁾。この貴族の気前よさの特異な証として、ストウは、彼がテナントからは地代を受け取るだけで満足して、その他に特別な奉仕を要求しなかったことを挙げているが、このことが示しているのは、貴族が民衆に暴政を尽くすことを君主の(ほとんど不可避ともいえる)巨大な権力⁹⁵⁾は、ほとんどの場合においては是認していたということである。バー

92) [* supported a great deal of the ancient magnificence **1759** | supported still, in some degree, the ancient magnificence **1763-73a** | still supported, in some degree, the ancient magnificence **1773b-**]

i) Strype, [Annals] vol. iii. Append. p.54 †. [Numb. XXVIII 'A Proclamation against Retainer'.] [* Appen. **1759-67b** | Append. **1770-**]

93) [* the magnificent feasts **1759-73b** | the sumptuous feasts **1778**]

k) [* *this note add. 1770-*] ハリソンは、女王の宮殿を列挙したのちに、次のように付け加えている。「しかし、わざわざ全てを繰り返して、女王陛下のもつ邸宅を語る必要があろうか。なぜなら、全ては彼女のものだからである。夏に外に出かけて休養し、田舎の地所を眺め、不正な役人やその代役によって哀れにも虐げられた庶民から苦情を聞くことを望まれるときには、どの貴族の邸宅といえども彼女の宮殿となるのであり、ここには望むがまま、ようやく自分自身の宮殿の1つに戻るまでずっと滞在を続け、そしてその宮殿にも好きなだけ留まるのである」(Book ii. chap. xv) [Harrison, *Description of England*. 当該部分は、1587年版に従う Frederick Furnivall, *Harrison's Description of England*, London, 1877では p.270 (chap.15 'Of Palaces belonging to the Prince').] こうした客人については、カエサルが滞在したときにキケロがアッティクスに宛てて述べたことを当てはめることができる。「だが、客人は『またこちらにお出での節は、どうかぜひお立ち寄りください』と言えるような相手ではない」(Lib. xiii. Ep.52) [引用部分はラテン語。高橋英海・大芝芳弘訳『キケロー選集』第14巻, p.392]。彼女が民衆を〔貴族や役人による〕抑圧から解放したとするならば(民衆は法によっては救済されていなかったようである)、彼女の訪問は貴族を大いに抑圧するものであった。

94) [* Kenibworth **1759** | Kenilworth **1763-**]

l) Biogr. Brit. vol. iii. p.1791 †. [*Biographia Britannica: or, The Lives of the Most Eminent Persons Who Have Flourished in Great Britain and Ireland*, London, 1747-66, 7 vols., vol. 3, note G. 但し原資料によれば365樽ではなく320樽である。]

m) Strype, [Annals] vol. iii. p.394.

n) Stowe, [Annales] p.674.

95) [* the absolute power of the sovereign, what was unavoidable, **1759** | the absolute power of the sovereign [, *add. 1764-67b*] (what was almost unavoidable) **1763-73b** | the great power of the sovereign (what was almost unavoidable) **1778**]

りは儉約家であり世襲の財産はなかったが、それでも100人の召使いからなる所帯を扶養していた^{o)}。彼は、ジェントルマンたちのために常に食卓を用意し、そして身分の低い者のためにも他に2つの食卓を用意しており、これらは彼が街にいようと郊外にいようと、いつも同じように給仕されていた。彼の身边には高貴な人々が随行しており、年1,000ポンドの資産をもつジェントルマンの従者を20人も数え上げることができるほどであったし、彼が召し抱えていた普通の身分の召使のなかには、1,000ポンドの資産の者に始まり3,000、5,000、10,000、20,000ポンドの者も数多くいた^{p)}。この時代には王の歳入はごく少なかったが、閣僚や廷臣は、無制限の大権⁹⁶⁾を利用することで多額の財を獲得する方法を時に見いだしており⁹⁷⁾、その額は、その当時よりも給料は多いが権限は制限されている今日において蓄財できる額よりも多かった⁹⁸⁾、ということは指摘しておくべきであろう。<60/68>

⁹⁹⁾ バーリは自らのカントリハウスで全部で12回にわたって女王を接待し、女王はそれぞれの折に3週、4週、あるいは5週のあいだ滞在した。彼は、各回に2,000ポンドから3,000ポンドを費やした^{q)}。この貴族が所持していた銀器の量は驚くべきほどである。[383] それは、重さにして14,000ないし15,000ポンドを下らなかった^{r)}。造形については考えないにしても、これは金額にして42,000ポンドを越える価値であっただろう。ところがバーリは、年4,000ポンドの土地と現金11,000ポンドを遺しただけであり、当時土地が一般的には10年分の価格で売却されていたことをふまえると¹⁰⁰⁾、彼のもっていた銀器は、そのほかの財産全額にほとんど匹敵した。どうやらこの当時は、銀器の造形にはほとんど値打ちが見出されていなかったが、おそらくは粗野なだけの造形だったのだろう。もっぱら重さだけが重要とされた^{s)}。<61/68>

しかしながら、こうした古来の慣習が多分に残っていたとはいえ、貴族は徐々に、優雅な奢侈を愛でる趣味¹⁰¹⁾を身に付けていった。こうして彼らは、なかでも多くの建物を建築するようになり、

o) Strype, [Annals] vol. iii. p.129 †. Append. [* Appen. 1759-73a | Append. 1773b-]

p) Life of Burleigh published by Collins. [Arthur Collins (c.1682-1760), *The Life of that Great Statesman William Cecil, Lord Burghley*, London, 1732.] [* Biogr. Brit. [Biographia Britannica] p.1267. 1759-70 | Life of Burleigh published by Collins. 1773a-]

96) [* the exorbitant prerogative 1759-73a | the boundless prerogative 1773b-]

97) [* found means 1759-67b | sometimes found means 1770-]

98) [* to acquire much greater fortunes than it is possible for them at present to gain 1759-67b | to acquire greater fortunes than it is possible for them at present to amass 1770-]

99) [* this para. add. 1770-]

q) [* this note add. 1770-] Ibid. p.40. [Collins, *Life of Burleigh*.]

r) [* this note add. 1770-] 巻末の注 OO を参照。[* note 1770-73a | note [OO] 1773b-]

100) [* land then was 1770-73a | land was then 1773b-]

s) [* this note add. 1770-] これはバーリの遺言に窺える。彼は各受取人に与えられるべきオンスの数値を示すだけであり、ある金細工商人を指名して各受取人への割り当てが正しく計測されているかを調べるように命じているが、物品の違いを区別はしていない。

101) [* a taste of elegant luxury 1759-73a | a taste for elegant luxury 1773b-]

均整のとれた巨大で贅沢な建築が王国を大いに飾り立てることとなった、とキャムデンが伝えている^り。しかしこのことは同時に、国民のなかから、栄えある歓待の習慣が失われることでもあった。だが、そうはいっても、このように出費の向かう先が変わったことが技芸とインダストリを促進した、と考えるほうがずっと適切である。古来の歓待は、悪徳、無秩序、騒乱、怠惰の源だったからである^り。<62/68>

そのほかの数ある奢侈のうちで、この時代に顕著に広まったのは、衣装における奢侈であった。女王は、国王布告でこれを制限するのがよいと考えた^り。彼女の実際の振舞いはといえば、その布告とはおおよそ相いれないものだった。彼女は、ほかのどんな女性よりも自らの美しさに自惚れ、ほかのどんな女性よりも観る者の心を釘づけすることを望んだから、彼女以上に衣装の贅沢を極めた人もいなければ、彼女以上にドレスの種類や華やかさを追い求めた人もいなかった。彼女はほとんど毎日違う装いで登場し、自らを優美に見せたくて種々のあらゆるモードを試した。そのうえ、彼女は自分の衣服に愛着をもっていたため、その1着たりとも捨てられなかった。彼女の死にあたってはワードローブにはありとあらゆる衣装が遺されており、生前に身に付けたその衣装の数は3,000着にも及んだ^り。<63/68>

古来の歓待の習慣が衰えて、貴族の従者が減ったことは、王の大権には好都合であった。それは大貴族の抵抗を不可能にすることを通じて、法の執行を促し、裁判所の権力を拡大したのである。[384] ヘンリ7世を取り巻く状況と彼の性格のうちには、いくつもの特有の原因があつて、それが王権を強大にした。こうした原因の多くは、後継の王たちの時代にも作用して、そのうえ、宗教上の党派対立や、大権の極めて重要な部分をなす至高権の獲得という事情も存在した。しかしながら、時代の習俗こそがこの期間の全てにわたって作用した一般的原因であり、かつては王にとって脅威であった貴族のもつ富や、そしてなにより彼らの影響力を絶えず減らしていったのは、時代の習俗であった。古くからのバロンがもっていた莫大な財は、奢侈を愛でる習慣のために、ばらまかれて霧散した。そして、[貴族の] この新しい出費の方法によって職人や商人は生活の糧を得て、自らのインダストリの成果にもとづいて独立して生計を立てるようになったので、貴族は、自らの賄いや手当てに頼って生活していた人々に対して当然のように主張していた、無制限に優越した立場を失うこととなった。いまや貴族は、ただ顧客が商人に対してもつような穏和な影響力をもったにすぎず、そうした影響力はもはや政府には危険ではありえない。土地所有者についても同じように、人ではなくなにより金銭を必要とするようになったから、利益を生み出すために土地を最大限

t) Page 452. [Camden, *History*.]

u) [* *this note add.* 1770-] 巻末の注 PP を参照。[* note 1770-73a | note [PP] 1773b-]

w) Camden, [*History*] p.452.

x) Carte, vol. iii. p.702 †. from Beaumont's Dispatches. [Thomas Carte (1686-1754), *A General History of England*, London, 1747-55, 4 vols., vol. 3, 1752. 同書の当該頁の注で典拠として 'Beaumont Dep. April 8, October 2' が挙げられている。]

活用することをめざし、土地を囲い込んだり多くの小農地を併せて規模の大きい農地をつくったりして、役に立たない人々をお払い箱にした¹⁰²⁾。そうした連中は、それまでは土地所有者の呼びかけに応じていつでも集まって、政府を転覆したり近隣のバロンを攻めたりする襲撃に絶えず駆け参じていた人々である。こうした一連の結果として、都市は大きくなり、中流の人々が豊かになって力をもつようになり始めた。そして、王は実質的に法と等しい存在であったから、誰もが自ずと王に従った。同じ諸原因のさらなる進展は、庶民院の特権を基盤にした新しい自由の体系を生み出していくことになるのだが、しかし、貴族の没落とこの階層の隆盛との間断の時期においては、王がそういった状況の利を活かして、ほとんど絶対的な権力を担うことになったのである。<64/68>

ベイコン卿、ハリントン、あるいはその後の著者たちの権威ゆえに一般にどのように考えられているにせよ、ヘンリ7世の法は、実は、この頃にイングランドの国制に生じた巨大な変転¹⁰³⁾にはほとんど寄与していない。罰金や賠償によって限嗣相続を解体しようとする方策は、彼より前の治世に既に導入されており、この王は、それまでの方策の不備を改善し、そうした方策に間接的に法的是認を与えただけにすぎなかった。ただし、彼が確固たる王権を獲得したからこそ、王は、バロンたちがそれぞれ割拠して行使していた支配権を掘り崩して、[385] 広く一般的に規則正しく法を執行できるようになったのである。王権伯の支配した諸州についても封建勢力¹⁰⁴⁾と同じ命運をたどり、ヘンリ8世の法によって^{y)}、こうした諸州の支配権は王のもとに組み込まれ、あらゆる法令は王の名において発せられることとなった。しかし、習俗の変化こそが、統治の密かな変転を引き起こした主たる原因であり、これがバロンの権力を覆したのである。¹⁰⁵⁾ この治世には、依然として、小作農や農民の隷属という旧来の慣習の名残りがあつたようだが^{z)}、この後の時代にはもはや存在しない。<65/68>

第5巻の注 [巻末の後注]¹⁰⁶⁾

注 NN [46段落]

1577年に印刷されたハリソンの『ブリテンの描写』には、第13章に次のような叙述がある¹⁰⁷⁾。
「現時点においてイングランドの女王陛下以上に、麗しい船舶をもつヨーロッパの王がいないことは確かである。女王の船舶は総じて卓越した能力を具えており、装備を完全に整えた状態であれ

102) [* discharged those useless hands 1759 | dismissed those useless hands 1763-]

103) [* the great revolutions 1759-73b | the great revolution 1778]

104) [* the feudal jurisdictions 1759-73a | the feudal powers 1773b-]

y) 27 Hen. VIII. c. 24.

105) [* the rest of this para. add. 1770-]

z) [* this note add. 1770-] Rymer, [Foedera] tom. xv. p.731 †.

106) [* all these notes add. 1770-]

107) [Harrison, *Description of England*. この注 NN では他の箇所とは異なり、ヒュームは同書1587年版には従わない。当該部分は1587年版では第2巻第17章である ('Of the Nauie of England').]

ば、そのうちの2隻だけで他国船の3隻や4隻は避けて通っていきたくらうし、もしそれらの船を本国に連れていかない場合には、そうした他国船を沈めるかそのまま見逃してやるかするだろう。・・・¹⁰⁸⁾ 女王閣下はいまや21隻の大型戦艦の建造と整備をなし終え、その戦艦の多くはギリシヤに係留されている¹⁰⁹⁾。これに加えて、[415] 女王閣下はほかの艦隊の建造にも着手しており、それらが完成したあかつきには比類するものを見出しえないことであろう。さらに彼女は、名高い3隻のガレー船、スピードウエル号、トライライト号、ブラックガレー号も保有しており、これらの戦艦と残りの王立海軍をご覧になった女王陛下は信じられないくらいご満悦であった。それゆえ、それ以降、女王の治める海岸が平穏であり続け、われわれをさもなくば侵略したであろう幾多の敵が引き返していったことは至極当然のことなのである¹¹⁰⁾。1,700ポンドから1,800ポンドの価値があると一般に見積もられているという商船について論じたあとで、著者は次のように続ける。「それゆえに繰り返すとなるが、わが海軍には巨額の財が日々費やされており、装備が整えられて出航準備のできた第1級・第2級の船(つまり商船)を、仮に今現在売却せねばならないにせよ、せいぜい1,000ポンドないし3,000ダカット¹¹¹⁾ くらいの価値にしかならないものはわずかである、ということをして全ての人々が少しは知るべきである。では、王立海軍についてはどう考えるべきだろうか。造船工がよく私に告げるように、王立海軍の1隻は、商船2隻分の価値があるのである。・・・¹¹²⁾ 欲深い者がこの話を聞いたなら、おそらくは全く信じないか、あるいはそのように費やされた金銭は女王の金庫に何の利ももたらしていないではないか、と考えるであろう。それはちょうど、かつてある優秀な執事が軍備のためには蓄えが必要だと聞いた際に、女王のお金はむしろ陛下にすぐに利をもたらすように使われるべきだと考えて発言したのと同じである。しかし、そうした人は、海をよく治めることこそがわが国土の安全の要であると理解したなら、非難を止めてすぐに考えを改めるであろう¹¹³⁾。この著者は森について論じて、次のように述べている。「膨大な量の木がこの数年で伐採されてしまった。もし次の御世100年のあいだに、この100年で人々がしてきたように、あるいは人々がしているように木々を速やかに減らしてしまうならば、石炭はロンドン市中においてさえもよい商品になるだろうと危惧されると言わざるをえない¹¹⁴⁾。実際ハリソンの予言

108) [これはヒュームが引用の中略を意味するために挿入した記号(原文ではダッシュ)であり、引用資料上のものではない。]

109) [* which lye 1770-73a | which lie 1773b-]

110) [Furnivall, *Harrison's Description of England*, pp.287-90.]

111) [* duckats 1770, 73b- | ducats 1773a]

112) [これはヒュームが挿入した記号(原文ではダッシュ)であるが、引用が中略されているわけではない。]

113) [Furnivall, *Harrison's Description of England*, p.291.]

114) [Furnivall, *Harrison's Description of England*, pp.342-43 (Book 2, Chap. 22 'Of Woods and Marishes'). 引用は、品目が大幅に省略されて石炭に限定されるなど、正確ではない。なおこの注 NN においてはこの箇所まで、例外的にヒューム自身の語りがイタリック体で表現され、引用は引用符なしのローマン体で記される。]

は数年のうちに実現した。1615年頃には200隻の帆船が石炭をロンドンに運んでいる。アンダーソン第1巻494頁を参照¹¹⁵⁾。

注 OO [61段落]

コリンズが出版した『バーリ伝』44頁による¹¹⁶⁾。この著者の示唆するところによれば、銀器のこの量は、バーリのような身分の人間にとってはただ少ないだけと考えられていたようである。「彼の銀器は14,000ポンドないし15,000ポンドを超えることはなかった」¹¹⁷⁾ というのである。ここで彼が、ポンドという単位を重さの単位として用いていることは明白である。それというのも、この伝記に添付されている遺書においてバーリは、遺産として、友人や親類に重さにして4,000ポンド近く、金額にして12,000ポンド超〔の銀器を〕を贈与しているからである。残りについては彼は2等分するように命じ、半分を後継者たる長男に、残った半分を次男と3人の娘で均分させた。以上からすると、もし銀器の全価値が金額にしてたった14,000ポンドないし15,000ポンドだったと理解するならば、家系を引き継ぐ者に対してその額の1/10も遺さなかったということになってしまうだろう¹¹⁸⁾。

注 PP [62段落]

ハリソンは次のように書いている。「イングランドの都市や栄えた町では、建物の大部分は木だけで作られており、[416] 風を防ぐために厚く土が塗りがたくてある。女王メアリの時代に、こうした粗末な建築がスペイン人を驚かせたことは確かであるが、しかし彼らが本当に驚いたのは、彼らが、こうした質素な小屋の多くで豪勢な食事をとっているのを目の当たりにしたときである。それで彼らのなかで少なからぬ名声を博していた者は、イングランド人は棒切れと泥でできた家に住んでいるが、たいていは王のように腹一杯食事をしている、と語ったという。どうやらこの人物は、王宮のような住居や宮殿に住む彼らの貧しい食事よりも、粗末な小屋に住むわれわれの立派な食事のほうを気に入ったようである。わが国の家の壁板に塗った土は、普通は白か赤か青である」(第2巻第12章)¹¹⁹⁾。この著者は、貴族の新しい家がたいていは煉瓦か石で作られたことや¹²⁰⁾、イングランドでガラス窓が使われ始めたことも付け加えている¹²¹⁾。

(犬塚 元)

115) [Anderson, *Collections*.]

116) [Collins, *Life of Burleigh*.]

117) [原文では、引用符で囲まれずイタリック体で記される。]

118) [$(£14000 - £12000) \div 2 < £14000 \div 10$]

119) [Harrison, *Description of England*. Furnivall, *Harrison's Description of England*, pp.233-34 (Book 2, Chap. 12 'Of the Maner of Building and Furniture of Our Houses'). ヒュームはこの引用部分の冒頭と末尾で引用を中略している。]

120) [Furnivall, *Harrison's Description of England*, pp.236-37.]

121) [Furnivall, *Harrison's Description of England*, p.238.]